



2018年11月14日放送

「変わるA型肝炎対策」

東京大学医科学研究所 先端医療研究センター感染症分野教授 四柳 宏
はじめに

今日は現在流行しているA型肝炎についてお話します。A型肝炎はB型肝炎やC型肝炎とは異なり慢性肝炎から肝硬変、肝細胞癌には進展しませんが、1%弱の方に意識障害を伴う重症肝炎を発症しますし、黄疸のなかなかとれない患者さんもおられます。今日特にお話したいのは感染経路の変化です。

これまでの食物を介した感染

A型肝炎ウイルスは口から入り、腸管から吸収され、門脈を經由して肝臓に至り感染が成立します。ウイルスは肝細胞で増殖し、胆汁さらには糞便中に排泄されます。糞便中に排泄されたウイルスの一部は腸管から吸収され、再び肝臓に到達します。こうした経過をとりながら次第に糞便へのウイルス排泄量が低下していきます。同時に肝炎も軽快の方向に向かいます。

A型肝炎の感染経路はその地域の衛生環境により大きく変わります。日本では上下水道の整備されていない時代には汲み取り便所から地面に吸収されたウイルスが井戸水に入り感染源になっていました。その後、衛生環境の改善に伴い感染経路は牡蠣を中心とする海産物のナマ食に変わりました。ウイルスに汚染された水を飲んだ牡蠣の内臓でウイルスは濃縮されます。こうした牡蠣を加熱不十分なまま食べるとウイルスに感染するわけです。現在でも上下水道の整っていない発展途上国では水を介した感染が数多く見られます。アジア、アフリカ、中南米の国の多くではこうした経路で国民の多くがA型肝炎に感染します。

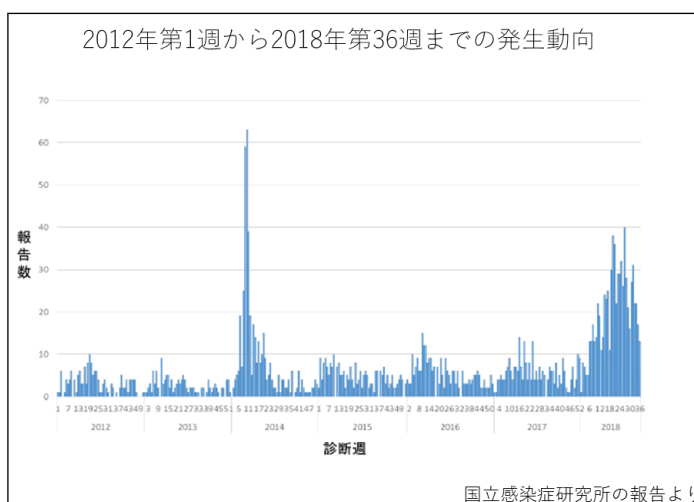
感染して発症するまでの期間は2-4週間とされています。発症時の症状としては他のウイルス肝炎に比べ発熱が目立つのが特徴です。39度を超える高熱の出ることも珍しくありません。従って医療機関を受診する機会も多いのですが、その時点では黄疸も目立たないため、かぜと診断され、対症療法が行われることが一般的です。当然のこと

ながら症状に改善はなく、そうしているうちに食欲低下、全身倦怠感、褐色尿、黄疸などが出現し、急性肝炎と診断されます。ウイルスの検査が行われ、A型肝炎と診断がつかれます。末梢血に異型リンパ球の出現がしばしば見られること、超音波検査を行うと脾臓の腫大が目立つのが特徴です。TTT という検査が行われていた時にはこの上昇が診断の助けになりましたが、最近はこの検査を行うことはなくなってしまいました。

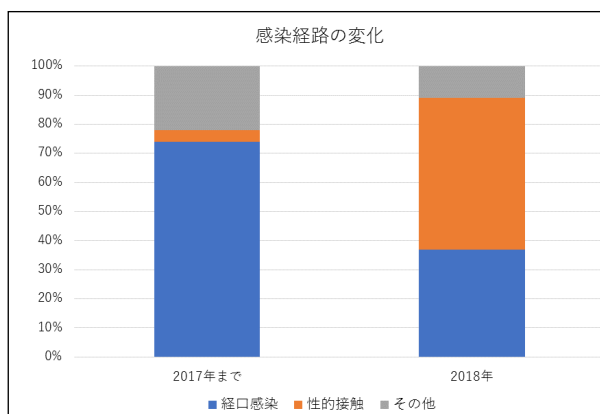
感染した人の糞便中には A 型肝炎の発症前後をピークに大量にウイルスが排泄されます。先ほどお話したように肝炎の軽快とともにウイルスの排泄量は次第に減ってきますが、2-3ヶ月間排泄の続く場合があります。従って感染した人の手洗いが不十分だと新たな方への感染、すなわち二次感染が起こります。日本でも料理をする人が A 型肝炎に罹られ、手洗いが不十分だったために他の方が感染された事例報告されています。いずれにしても日本ではこうした“食物を介した感染”が昨年までは主体で、その割合は70%以上でした。

性的接触が主な感染経路に

理由はわかっていませんが、A型肝炎は4年ごとに流行を繰り返します。日本では冬季オリンピックの行われる年に感染を繰り返します。2014年には433人の患者さんが報告されており、過去にくらべてかなり多い年でした。今年はその4年後ですが、9月9日までの時点で国立感染症研究所に724人の報告があり、これまでにない規模で流行が起きています。



この724人の患者さんについては届け出の際に推定感染経路が記載されています。今年では従来からの経口感染は37%しかありません。代わりに性的接触が52%を占めています。特に、男性における性的接触の割合が57%で、過去の報告（5%）と比較して高いのが特徴でした。つまり今年のA型肝炎の流行は男性における性的接触が原因で増えているわけです。男性間の性的接触の



例が多いことが伺えます。

今回の A 型肝炎の伝播は 2 年前に台湾で始まり、その後ヨーロッパ、アメリカ、タイなど多くの国で流行しています。台湾ではワクチンの接種キャンペーンを国が行うことで最近になり 3 年越しのアウトブレイクがやっとおさまりました。ヨーロッパやアメリカではまだ新規発生がおさまっていません。世界的なアウトブレイクと言って

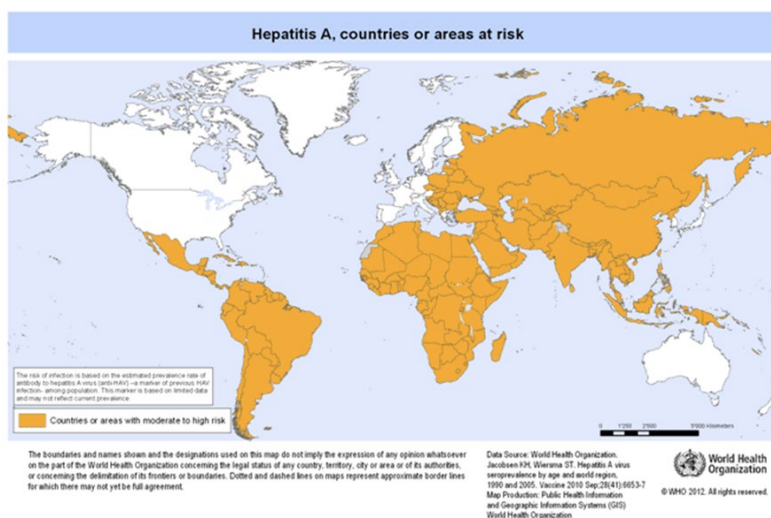


図. A 型肝炎の流行地域
(<http://www.who.int/ith/diseases/hepatitisA/en>から引用)



もよいと思います。これらの国でも男性における性的接触が主な感染経路です。

あまり知られていないかもしれませんが A 型肝炎は性感染症の一つであり、日本性感染症学会のガイドラインにも独立した項目として記載されています。性行為の際にウイルスの付着した皮膚や性器に接触することが感染の原因になるとされています。従って複数のパートナーがいる人は特に感染のリスクが高いこととなります。男性から男性への感染も数多く報告されています。

A 型肝炎の急激な増加に対して本年の 7 月 18 日に厚生労働省から地方自治体、医師会、感染症関連の学会等へ注意喚起がなされました。この中では A 型肝炎の発生状況が例年より増加していること、推定される感染経路として性的接触が多いことについて触れられています。

ワクチンの効果と重要性

A 型肝炎の症状は先ほどお話した通りです。発熱が先行し、その後食欲低下、全身のだるさ、褐色尿、黄疸が出現します。意識障害を伴う劇症肝炎として発症する方の割合が当初高いと報告されていましたが、その後の報告では 0.3%程度であり例年と差はないとされています。ただし、ALT の値は例年よりも高いような印象があります。黄疸の遷延する症例、ALT が再上昇する症例もありますがその割合はこれまでと比べ、高いと思います。

A 型肝炎には効果が高く副作用の少ない優れたワクチンがあります。A 型肝炎ワクチンをトラベルワクチンとして接種された方もこの放送をお聞きの方の中にはおられるかもしれません。アジア地域、アフリカ地域、中南米に渡航する人にはワクチンの投与

が強く勧められています。海外で食事をしない人はいませんので、口にすることがウイルスに汚染されていた場合、感染を防ぐことが難しいからです。

A型肝炎ワクチンは優れたワクチンで事前に接種することでほぼすべての方は免疫を獲得することが可能です。また、感染の機会があった後でも2週間以内に接種すると発病予防効果があることが知られています。従ってA型肝炎に罹った人と性的接触を持った後でも予防効果があることになります。

ワクチンの投与はA型肝炎を防ぐ意味で大切です。手洗い等の衛生管理が重要であることは言うまでもないことですが、不特定多数との性的接触の機会がある人などはA型肝炎に罹る危険性が高いということになります。こうした方に対して予防接種に関する情報提供を検討し、積極的に接種して頂くことが望まれます。

また、我々医療従事者も注意が必要です。患者さんをA型肝炎と診断した場合には、性感染症の可能性があることを認識し、HIV感染症、クラミジア感染症、梅毒、淋病など他の性感染症が陰に隠れている可能性を考えて診療にあたる必要があります。私たちの施設でもA型肝炎がきっかけでHIV感染がわかった方がおられます。

性感染症を普段診療されることの少ないところに性感染症としてのA型肝炎の患者さんが受診されると困るとお感じになる先生もおられるかもしれません。A型肝炎と診断した際の患者さんへの説明ですが、今シーズンはA型肝炎が流行していること、糞便中には長期にわたりウイルスが排泄されること、同居している人や性的パートナーに感染が伝播する可能性があることなどを丁寧にお話し頂き、もし性感染症の可能性があるのであれば患者さんと相談の上、他の性感染症の検査をすることが望ましいと思います。なお、感染経路として男性間性交渉が考えられる患者さんもおられますが、こうした方の人権侵害にならないよう十分に気をつけて頂きたいと思います。

今日は現在大都市を中心に流行しているA型肝炎についてお話ししました。